
and Know

風龍 菜斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

and Know

【Nコード】

N7312Y

【作者名】

風龍 菜斗

【あらすじ】

主人公の中谷^{なかたに}

桜榎^{おうか}は夢でみた男子と現実で出会う。

「僕が誰かわかる？」

いきなり知らない人にそんなこと言われても答えられない。知ってるような知らないような……よくわからない。

別に知っててもいいことないし……。

名前も聞けばわかるかも知れないが聞く勇気がない……。でも何となく興味がある。

誰なんだろう……

「僕は君の事知ってるよ」

……あっちが知っててこっちが知らないなんて……ありえない。きつと知ってるはずだ。忘れてるだけだ。

「君の名前は中谷桜榎。都立高校に通う高校1年生」

なぜ知っているんだ……。

私はこいつの事を知らない。知ってるかもしれないがわからない。

「君は僕の何を知っているのかな？」

「何も知らない」

「君は僕をしってるはずだよ」

知らない。

「僕は君の……」

「……」

「恋人」

「は？」

「嘘に決まってるじゃん」

急に恋人とか言われたら「は？」って言うだろ。誰でも。

「じゃあ……」

あんたは誰なの？と言おうとしたけどやめた。なぜだろう。言いたかったのに言えなかった。勇気がないから？だったら言おうとしないし……じゃあ……現実逃避？かもしれない。じゃあなぜ現実逃

避をしたのだろうか……。それはわからない。
私は……。なにを恐れているんだ？

+++

「桜榎聞いて！ビッグニュースだよ！」

「なに？」

「転校生が来るって！ しかも男子！」

「へー」

「どうでもいいし。」

「イケメンらしいよ」

「で？」

「転校生とかどうでもいい。」

「で？ じゃないよ。桜榎の好みの顔なんだって！」

「……………！」

「どんな奴だ！ さあこい！ 転校生！」

「さあ皆の知ってる通り転校生が来た。今から紹介するから席につけ！」

「さあ、転校生！ 早く顔出せッ」

「中村、入っておいで」

「ガラガラガラ……………」

「転校生が入ってきた。」

「……………！」

「この顔……………見たことある……………」。

「まさか……………ね……………」。

「あの……………恋人がどうのこうのって言ったた奴……………？ んな
ワケないな。」

「中村雄太です。よろしくお願いします」

「さあ皆、拍手して」

「皆の拍手の音が頭に響いてくる。」

「……………」

中村という奴と目が合った。

「じゃあ中村君、中谷ってあの……前髪パツツンの茶髪の人の隣に座ってくれ」

「……………」

よりによつて隣かよ。

私の通つてる学校って何故か隣と机くつつけるんだよねー。

小学生かよつてなる。

「よろしく。中谷桜榎さん」

そう言つと中村はニコツと笑つた。

「お前……………」

なぜ……………私の下の名前を知つてる……………。

やっぱりこいつ……………。

いや……………まで……………。

お父さんの……………息子かもしれない……………。

いや……………息子はいないはず。娘がいるとしか言つてなかつた気がする……………。

「中谷つて呼ぶのは駄目かな……………？」

「……………」

嫌だ……………。

得体のしれないやつから名前をよばれるだと……………？

「じゃあ桜榎つてよぶね」

「……………！？」

こいつ……………真面目に殺意が湧いたんだけど……………。

「可愛いな。顔赤くしちゃつて」

「な……………っ！！」

一回殴つていいですか……………？

「中谷！ 転校生が気になるのはわかるがHR終つてからにしろ！」
なんで私が怒られなきゃいけないんだ……………。

「先生、逆に僕がこの子の事気になつてるんです。悪いのは僕です

「よ」

「こいつ何言ってるんだ？ 頭大丈夫かよ」

「そうか。ナンパか。若いっていいな」

教室が盛り上がった

「よろしくね桜榎」

「気持ち悪い……………」

「んじゃHR続けるぞ」

……………マジでこいつと学校生活送らなきゃいけないの……………？

HRが終わった。

さ……………読書しよっと。

しばらくして転校生の机の周りに人だかりができた。

「……………」

当たり前な事だけど読書の邪魔だけはされたくない……………。

本読む気失せた。読むフリして話でも聞いていようか……………。

「中村君、初めまして！ 私、林祐子。よろしく」

祐子が中村に話しかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7312y/>

and Know

2011年11月21日23時47分発行